

3 病害虫防除

(1) イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除し、発生が多い場合は、6月上旬に水面施用剤を散布する。この時期の防除でイネドロオウムシも防除できる。

(2) 斑点米カメムシ類

カメムシの発生源となっている水田周辺の休耕田や、カメムシを誘引する畦畔の雑草（主にイネ科雑草）は、開花・結実する前に刈り取る。また、雑草の刈取りは水稻の出穂2週間前（7月中旬頃）までに終了する。

(3) 葉いもち

取り置き苗は、葉いもちの発生源となるので、補植が終わったら、直ちに処分する。

葉いもちは、早い年には6月下旬に発生がみられるので、ほ場をこまめにチェックし、病斑が見られた場合には、航空防除まで待つのではなく、直ちに防除する。

復元田や、いもち病に弱い品種を作付けした場合は、葉いもちの発生が見られなくても、水面施用剤による予防防除を必ず行う。

水面施用剤（オリゼメートを含む水面施用剤、オリブライトを含む水田施用剤、ブイゲット粒剤）は、6月20日前後から6月末まで（中干し1週間前を目安）に湛水のまま施用する。施用後1週間は止水し、落水、掛け流しをしない。その間の入水は、水尻を止めたままで行う。

※ 「青天の霹靂」は、農薬の成分使用回数を地域慣行の1/2以内とすることが必須なので、農薬の使用に際しては成分数を確認する。

畑 作

大豆の雑草防除と中耕・培土をしっかりと行おう！
小麦の出穂期はやや早まる見込み。赤かび病の適期防除に努めよう！

◆大 豆◆

1 は 種

砕土が粗いと発芽率が劣るので、砕土はていねいに行う。

は種量は「おおすず」で7 kg/10aを基準とする。

は種直後の多雨は、出芽率、初期生育の不良を招くので、気象情報に注意しながら作業する。

は種作業は6月10日頃までに終わるようにする。やむを得ず、は種が遅れる場合は畦幅や株間を詰めて、は種量を増やす。

2 雑草対策

(1) 土壌処理剤

土壌処理剤は、ほ場表面の水分が低いと効果が劣るので、は種後速やかな散布が望ましい。また、出芽した雑草には効果がないので注意する。

(2) 茎葉処理剤

イネ科雑草用の茎葉処理剤は、薬剤により効果が異なるので発生状況に合わせて選択し、効果的に使用する。

広葉雑草に使用できる茎葉処理剤は大豆バサグラン液剤のみであり、散布回数も1回となっているので、発生状況に合わせて効果的に使用する。

土壌処理、茎葉処理で残草が多い場合は、畦間処理の除草剤が利用できる。ただし、大豆に薬剤が飛散しないよう、専用ノズル、カバー等を使用する。

(3) 中耕・培土

1回目：本葉2～3葉期 初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。

2回目：本葉5～6葉期 第1本葉のつけ根まで土寄せする。

◆小 麦◆

1 病害虫防除

(1) うどんこ病、赤さび病

早期発見に努め、発生初期での防除に努める。薬剤は下葉にも十分付着するように散布する。

(2) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなる。出荷製品に混入すると、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール）を生産し、下痢や嘔吐などの中毒症状を起こす場合があるため、出荷できない。防除は、開花始め～開花期に1回目、その7日後に2回目の薬剤散布を行う。

2 収穫作業

(1) ネバリゴシ

出穂後46～50日、出穂後積算温度830～950℃、子実水分25%を目安とする。

(2) キタカミコムギ

出穂後50～55日、出穂後積算温度900～1,000℃、子実水分25%を目安とする。穂発芽しやすいので、天候しだいでは水分30%での刈り取りが必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40℃以下にして品質低下を防ぐ。

りんご

良果を見極め、早期適正着果で高品質果実生産に努めよう！
黒星病徹底防除推進期間（4月～6月）的確な防除を行おう！

ふじの落花日は平年より5日早い5月14日であった。本年は、開花中に低温や強風に見舞われたが、結実はおおむね良好と思われる。摘果は果実形質を見極めながら進め、できるだけ早い仕上げで高品質果実の生産に努める。

■ りんごの生育ステージ

板柳町五幾形

(月/日)

品種名	区分	発芽日	展葉日	開花日	満開日	落花日
ふじ	本年	4/ 2	4/16	5/ 4	5/ 9	5/14
	平年	4/ 9	4/19	5/ 9	5/14	5/19
	前年	4/ 7	4/16	5/ 6	5/11	5/16
	平年比	7日早	3日早	5日早	5日早	5日早
つがる	本年	4/ 2	4/18	5/ 3	5/ 8	5/13
	平年	4/ 8	4/20	5/ 8	5/13	5/18
	前年	4/ 6	4/17	5/ 5	5/10	5/15
	平年比	6日早	2日早	5日早	5日早	5日早
ジョナ ゴールド	本年	3/30	4/12	5 /1	5/ 6	5/12
	平年	4/ 6	4/15	5/ 6	5/12	5/17
	前年	4/ 5	4/11	5/ 4	5/10	5/15
	平年比	7日早	3日早	5日早	6日早	5日早
王 林	本年	3/31	4/14	5/ 1	5/ 6	5/12
	平年	4/ 6	4/16	5/ 6	5/11	5/16
	前年	4/ 6	4/15	5/ 3	5/ 8	5/14
	平年比	6日早	2日早	5日早	5日早	4日早

平年値：平成8年～27年の20年平均

1 摘 果

摘果が遅れると、玉伸びや果実品質、次年産の花芽形成にも悪影響を及ぼすので早期適正着果に努める。

果実形質の良し悪しの判別が可能となった時点から、仕上げ摘果を行うが、本年は6月10日を目安に終えるようにする。

■ 標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)
紅玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・早生ふじ・トキ・シナノゴールド・ きおう・金星・シナノスイート・未希ライフ・さんさ ・ぐんま名月・春明21・星の金貨・千雪・夏緑・恋空 ・祝・花祝	4頂芽に1果	25
北斗	4.5頂芽に1果	22
陸奥・世界一	5頂芽に1果	20

注) 摘果剤を散布した場合、落果は散布10日後頃から始まり、以後10～14日間続く。散布時の天候等の条件によって効果が十分に現れない場合もあるため、仕上げ摘果は遅れないように注意する。

2 ヒオモン水溶剤によるふじ・早生ふじのつる割れ防止対策

開花が早く、大玉になりやすい年や例年つる割れの多い園地では、ヒオモン水溶剤の利用も検討する。

■ ヒオモン水溶剤の使い方

品種名	使用目的	使用時期	本剤の使用回数	成分総使用回数	希釈倍数	10 a 当たり散布量	備考
ふじ 早生ふじ	つる割れ 軽減	満開20日 ～30日後	1回	3回 以内	3,000 倍	300～ 600ℓ	展着剤不要 有効成分： 1-ナフタレン酢 酸ナトリウム 4.4%

- 注) 1 本剤は単用散布とする（展着剤は使用しない）。
2 散布後に葉がしおれる症状(エピナスティ)を示すが、1週間後にはほぼ回復する。
3 高温、乾燥時の散布は避ける。新梢先端葉及び樹冠内の果そう葉の黄変落葉や頂芽の欠落が発生した事例がある。
4 極端に樹勢の弱い樹への散布は避ける。
5 果実肥大が抑制される場合がある。
6 新梢の二次伸長を助長する場合がある。
7 摘果剤(ミクロデナポン水和剤85)を散布した後に本剤を使用した場合、摘果剤の効果が抑制される。

3 病虫害防除

黒星病が発生していることから、被害葉・被害果は見つけしだい摘み取り適正に処分する。また、感染拡大を防ぐため6月いっぱいには10日間隔での薬剤散布を徹底する。散布に当たっては、散布量を節約せず適量を散布する。なお、散布予定日に降雨が予想される場合は前倒しで散布する。

4 追肥

追肥を計画している場合は6月末までに終わる。施肥量は結実量と樹勢に応じて1樹ごとに加減する。

5～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- 使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。

特産果樹

◆ぶどう◆

スチューベンの開花は平年より5日程度早い見込み。
摘梢はできるだけ早く行い、樹勢に応じた摘心を心がけよう！

スチューベンの展葉日は5月4日（鶴田町境）で、平年より5日早かった。

1 新梢の誘引・結束

薬剤や日光の通りを良くするため、新梢は随時角度や間隔を調整しながら架線に誘引し、結束する。

2 摘心（1回目）

1回目の摘心は開花7日前頃に行い、品種や樹勢に応じて強さを調整する。

品 種	摘心部	樹勢	副梢の取り扱い
スチューベン	第1花穂 上位5枚	強・中	①すべての副梢をかき取り、その後発生した先端の副梢を1本残す ②上位1本の副梢を残し、下位はかき取る ※①か②を選択する
		弱	上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
キャンベル・アーリー	第1花穂の 上位3～4枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る
サニールージュ シャインマスカット	第1花穂の 上位5枚		上位1本の副梢を残し、下位はかき取る
ポートランド ナイアガラ	第1花穂の 上位4～5枚		上位2本の副梢を残し、下位はかき取る

3 花穂の整形

花穂整形時期は、開花5日前頃から1～2花咲き始める時が適期である。

スチューベン、ポートランド、ナイアガラでは、花穂の岐肩（通称：カタ）のみを除去する。

キャンベル・アーリーでは、花穂の岐肩、岐肩下の長い支梗や軸の間隔が広いものを除去し、さらに花穂の先端も軽く切り詰める。

シャインマスカットは、岐肩と上部支梗を除去し、花穂の先端4cmを残す。

4 シャインマスカットの無核栽培

シャインマスカットの無核栽培では無種子化を確実にするため、ストレプトマイシン処理を行ってからジベレリン及びフルメット処理を行う。

(1) ストレプトマイシン処理

満開予定日14日前～開花始期にストレプトマイシン200ppm溶液を花房に散布または浸漬する。

(2) ジベレリン及びフルメット処理

ア 無核3回処理の場合（ジベレリンは2回処理）

1回目は無種子化のために、満開時～満開3日後にジベレリン25ppm溶液に5ppmのフルメット液剤を加用した溶液に花房浸漬する。処理適期は、花穂先端まで咲ききったときである。

2回目は果粒肥大促進のために、満開10～15日後にジベレリン25ppm溶液に果房浸漬する。

イ 無核2回処理の場合（ジベレリンは1回処理）

満開3～5日後（落花期）に、ジベレリン25ppm溶液に10ppmのフルメット液剤を加用した溶液に花房浸漬する。

5 病害虫防除

■ 薬剤散布（県ぶどう病害虫防除暦：スチューベン基準より抜粋）

【農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

時期と10a 当たり散布量	基準薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
開花10日前 6月上旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 800倍 又はキノンドー水和剤40 600倍 又はインダーフロアブル 8,000倍 又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	ベストガード水溶剤 1,000倍 又はパダンSG水溶剤 1,500倍 又はアグロスリン水和剤 2,000倍 又はアディオンフロアブル 1,500倍
開花直前 6月中旬 (250リットル)	アリエッティC水和剤 800倍 又はゲッター水和剤 1,500倍	ベストガード水溶剤 1,000倍 又はパダンSG水溶剤 1,500倍 又はジノフラテン剤※ 2,000倍
落花直後 6月下旬 (250リットル)	ロブラール水和剤 1,500倍 又はポリベリン水和剤 1,000倍 又はスイッチ顆粒水和剤 2,000倍 又はフルピカフロアブル 2,000倍	アグロスリン水和剤 2,000倍 又はアディオンフロアブル 1,500倍 又はジノフラテン剤※ 2,000倍

※ジノテフラン剤：スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤

- 注) 1 灰色かび病の発生が多い園地では、開花直前にゲッター水和剤を選択する。
 2 ベと病の発生が多い園地では、開花10日前にアリエッティC水和剤又はキノンドー水和剤40、開花直前にアリエッティC水和剤を選択し、落花直後にランマンフロアブル2,000倍又はライメイフロアブル4,000倍も使用する。
 3 黒とう病の発生が多い園地では、開花直前にアリエッティC水和剤、落花直後にポリベリン水和剤を選択する。

◆おとう◆

早めの摘果と適期防除で品質向上に努めよう！

佐藤錦の満開日は4月30日、落花日は5月11日（鶴田町菖蒲川）で、いずれも平年より5日早かった。

1 裂果防止対策

雨よけハウスで、まだ被覆していない園地では早急に被覆し、裂果防止に努める。

2 着色管理

(1) 葉摘み

果実の着色がある程度進んだ頃（おおむね収穫予定の7～10日前頃）から行い、果実に直接かぶさっている葉を軽く摘み取る。過度の葉摘みは果実品質を低下させたり、翌年の花芽の充実不足、樹勢の低下を招くおそれがあるので、摘み取る量は最小限にとどめる。

(2) サンキャッチ液剤30Sの利用

着色促進のため、サンキャッチ液剤30Sを利用する場合は、以下により使用する。

■ サンキャッチ液剤30Sの使用方法

対象品種	佐藤錦、南陽
処理方法	600倍液を立木全面散布
処理時期	収穫開始14日前（着色が樹全体の2～3割頃）と7日前の2回
散布量	300リットル/10a

- 注) 1 散布直後降雨は効果を減じるので、晴天日に散布する。
2 樹冠内部が暗いと効果が劣るので、樹冠内部の明るさを適正に保つ。
3 展着剤は不要である。
4 他の薬剤と混用せず、単用で用いる。

3 収穫

収穫は満開日からの日数が目安になるが、天候によっては早まることもあるので、品種の特性（着色、大きさ、形状、食味など）を重視し、成熟したものから順次、数回にわたって行う。

■ 各品種の収穫期

品 種	満開日から収穫日 までの日数	収 穫 期 (県南果研セ、平年)
紅 さ や か	45～50日	6月下旬
佐 藤 錦	45～55日	6月下旬～7月上旬
ジュノハート	55～60日	6月下旬～7月上旬
紅 秀 峰	60～70日	7月中旬
サ ミ ッ ト	60～70日	7月中旬
南 陽	60～70日	7月中旬

5 病害虫防除

■薬剤散布（県おうとう病害虫防除暦より抜粋）

【農薬はおうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない】

時期と10a 当たり散布量	基準薬剤名と倍数
満開35日後 6月上旬 (500リットル)	アミスター10フロアブル 1,000倍
	又はファンタジスタ顆粒水和剤 3,000倍
	又はナリアWDG 2,000倍
	又はアンビルフロアブル 1,000倍
	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍
収穫前 (500リットル)	アミスター10フロアブル 1,000倍
	又はナリアWDG 2,000倍
	又はインダーフロアブル 5,000倍

- 注) 1 満開35日後以降、灰星病の多発が懸念される場合は、佐藤錦の収穫7日前頃にルビゲン水和剤、インダーフロアブル、パスワード顆粒水和剤のいずれかを特別散布する。
- 2 「紅秀峰」や「南陽」、「サミット」などの晩生種では、灰星病対策として収穫前にアミスター10フロアブル又はナリアWDGを特別散布する。
- 3 ショウジョウバエ類の発生が懸念される場合は、満開35日後と収穫前にテルスターフロアブル又はスカウトフロアブルを特別散布する。

野菜

計画的な管理作業と草勢にあわせたこまめな温度管理に努めよう！

◆トマト◆

1 定植後の管理

ハウス内の温度は昼間25℃前後で管理する。高温障害が発生しやすいため、天候によりサイド換気や肩換気を行う。

気温が低下する日や夜間はサイドを閉め、保温に努める。夜間は14℃以上を目標とする。6月中旬以降、最低気温が14℃以上になれば、夜間でもサイドを解放する。

2 着果の促進

トマトトーン処理は、なるべく気温の低い午前中に行う。低温時（20℃以下）50倍、高温時（20℃以上）100倍の濃度で、1花房当たり1～1.5cc噴霧する。

1～4段花房は4番花開花始め、5段花房以降は3～4番花開花始めに行い、散布回数は1花房1回とする。

3 かん水と追肥

試しかん水は、2段花房のトマトトーン処理後に1株当たり1リットル程度を目安に行うが、草勢が強い場合はトミー液肥ジャンボ(500倍)を加用する。

本格的なかん水と追肥は、3段花房のトマトトーン処理終了後から行うが、活着が遅れたほ場や草勢が衰えている場合は処理前に行う。

1回当たりの追肥量は、3日に1回の場合は、窒素成分0.5kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物8.3kg/10a以内)、2日に1回の場合は、窒素成分0.3kg/10a以内(トミー液肥グリーンで現物5kg/10a以内)とする。

4 摘果

3段花房トマトトーン処理後に、1段果房を一斉に摘果する。奇数段は3果、偶数段は4果になるよう摘果する。

ただし、草勢が極端に弱い場合は、2段花房トマトトーン処理後1～2果程度に着果を制限する。

5 病虫害防除

灰色かび病が発生しやすくなるので、葉先枯れ(カリ欠乏症)の予防や花カスを取り除くとともに、ハウス内の換気と薬剤による予防防除に努める。

アザミウマ類の発生が多くなるので、開花前にはほ場周辺のクローバー等を除草するとともに、薬剤による防除を行う。

◆メロン◆

1 温度管理

定植後は最高気温28～30℃、開花期は最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉などでこまめな温度・湿度管理を行う。特に夜間の閉めきりは軟弱徒長となり、病虫害の発生の原因となるので、こまめな開閉を心がける。(外気の最低気温15℃以上なら夜間開放)

2 かん水

開花期のかん水は、湿度の上昇により花粉が出にくくなるので控える。

着果確認後(鶏卵大の頃)から着果2週間後頃までかん水を行う。1回の量は、株当たり4リットルが目安となるが、土壌水分により加減する。

草勢(つる先の立ち上がり、葉色、孫づるの伸長)を見て、液肥や葉面散布を行う。

3 摘心と整枝

(1) 結果枝(孫づる)の摘心

ア 弱勢の場合 着果節位を1～2節上げ、着果確認後に、孫づるの葉1枚を残し、摘心する。

イ 適勢の場合 開花前後に孫づるの葉1枚を残し摘心する。

ウ 強勢の場合 開花予定日の3～4日前に孫づるの葉1枚を残し、摘心する。

(2) 結果枝以外の整枝

22～23節で子づるを摘心する。15～20節の孫づるを除去する。

整枝は着果後10日までに終了し、風通しを良くし、ネットの形成を促進する。

果実肥大期は、受光体勢を維持するため、茎・葉を動かさないようにする。

農作業中の熱中症に注意しましょう

～熱中症は適切な予防をすれば防ぐことができます～

○暑さの感じ方は人によって異なります！高齢の方は特に注意が必要です。

○まわりが協力して、熱中症予防を呼びかけ合うことが大切です。

○天候の変化が激しい時期ですが、高温が予想される日は、熱中症予防を忘れないようにご注意ください。

花 き

施設内の温度変化が激しい時期です。
適正な温度管理により高品質な花きの生産に努めよう！

◆キ ク◆

1 定植前後の管理

採穂に当たっては、太さが揃い充実したものを選択し、定植2週間前から挿し芽を行う。10月出荷の作型は、6月上旬～下旬に定植できるよう計画的に作業を進める。

挿し芽後は、最高温度25℃を目安に管理し、定植1週間前からは温度を下げて、順化させる。

定植の数日前に十分かん水する。定植後は軽くかん水し、ハウス内は日中25℃以下を目安に管理する。

2 病虫害防除

白さび病、アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類の早期発見・早期防除に努める。また、オオタバコガやヨトウムシ類の侵入を防ぐため、ハウスのサイドや出入口等に防虫ネットを早めに設置する。

◆トルコギキョウ◆

1 定植作業

10月出荷の作型では、6月下旬頃までに定植する。老化苗は生育が劣るので、本葉が4枚展開までのものを使用する。

高温が続く場合には、定植1週間前から遮光率40%程度の遮光資材で被覆し、地温を下げておく。軟弱徒長を防ぐため、活着を確認したら被覆資材は除去する。なお、除去は曇天または夕方に実施し、葉焼けを防ぐ。

定植は深植えとせず、株元を強く押さえないようにする。

2 定植後の管理

気温25℃以上が続くと生育の停滞やロゼットの要因となるので、換気等で温度管理を徹底し、発蕾までは乾燥させないように管理する。

分枝が低節位から発生した場合は、草丈が25cm前後の時期に地際から20cm程度までの側枝を摘み取り、主枝の伸長を促す。

3 病虫害防除

灰色かび病、アブラムシ類、アザミウマ類の早期発見・早期防除に努める。

立枯性病害は、多肥や過湿の条件で発生しやすいので、施肥、換気、かん水などの管理を適正に行うとともに、病気の蔓延を防ぐため発病株の抜き取り処分を徹底する。

◆土づくり◆

施設栽培では、肥料成分の過剰蓄積が見られるため、土壌診断に基づく適正な施肥を行う。